
ハイスクールD×D～黄昏の転生者～

永劫破壊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハイスクールD×D〜黄昏の転生者〜

【Nコード】

N5420BA

【作者名】

永劫破壊

【あらすじ】

男は死んでしまい気が付くと当たり一面、真っ白な空間だった。その空間で自分のことを神様と言う少年に出会った。少年は言う。

「僕の作る物語の主人公にならないか？」

これはハイスクールD×Dの二次創作です。

素人の処女作なのであまり期待はしないでください。

プロローグ

ある日の夏の日、俺は死んだ。

「はずなんだよなあ……」

そう、俺は死んだはずなのだ。

それが気が付いたらあたり一面、真っ白な変な場所に突っ立てた。

「さて、どうして「やあ、こんにちは」——ッ!？」

瞬きほどの一瞬でいきなり十歳くらいの少年がこう：パツと現れた。

「お前…なんなんだ？」

「僕？ 僕は……そうだなあ君達氣に言うならば神様って所かな。
まあ正直ぜんぜん違うんだけどね、そんな感じってだけのことだよ。」

僕はくモノガタル>

物語を物語るだけの存在さ。」

……？

「意味わかんないって顔だね、まあそうだね解んでもいいんだよ。」

解んないんだからこそ僕は神様だって言ったんだから。」

「……まあいいや、それで？ その神様が俺に何のようなんだ？」

「君には今から僕が物語る物語の主人公になって欲しいだけさ。君のメリットはもう一度生を受けられる。」

僕のメリットは君が主人公ならばきっと面白い物語になると思うんだ、だからそれが僕のメリット。

君は自由に、君の思うままにすごしてくれればいいんだよ。それこそが僕の求める君の物語なんだから」

…まあそれはいい、それよりも。

「なぜ俺なんだ？ もっと適任なのはいっぱい居るだろう？」

「しいて言うならばなんとなくさ！！ それ以外に…いや、それ以上になんか理由が必要かな？！」

「……分かった、行くよ」

「ありがとう！ さて、今から君が転生する世界は結構命の危険があったりするからね、結構強い力を、君にピッタリの力を上げよう」

「命の危険って…俺はどんなところに行くんだ」

「それは秘密さ……さあイってらっしゃい。
いい人生を」

そして、俺の新しい人生が始まった

プロローグ（後書き）

感想と修正点をもらえるとうれしいっす

主人公設定（前書き）

物語が進むにつれて設定を追加していきます

主人公設定

名前

..兵藤 一誠

性別

..男

容姿

..原作とは違い少しDiesの主人公藤井 蓮の要素が入っている

能力

・ 神から「命の危険がある」なんて言われたので結構がんばって体を鍛えた

・ その辺の不良五、六人は無傷で倒せる、だがさすがに悪魔や天使、堕天使には敵わない

F a t e風ステータス

一般人（人間）

筋力E（握力35前後）

耐久E（自動車とぶつかって死ぬ）

敏捷E（自転車よりも少し遅いくらい）

魔力E（指の先からポツと火が出せるのが限界）

幸運D（小銭拾ってラッキー程度）

宝具（神器）――（普通は持ってねえよ）

一誠（悪魔になる前）

筋力D（握力50前後）

耐久D＋（自動車とぶつかって骨折らない程度）

敏捷D（自転車より速く、自動車遅より遅い）

魔力C（中級悪魔レベル、神様が色をつけてくれた）

幸運B（主人公補正みたいのではない、あくまでもただ主人公が幸運なだけ）

宝具（神器）EX

ブーステッド・ギア

・赤龍帝の籠手

ランク…EX 種別…対人宝具

能力…自分の力を十秒ごとに二倍にしていく

…自分のためた力を他人に譲渡する

・????

備考

・転生してから夢の中に黄金の黄昏の浜と少女の歌声そしてギロチンの夢を見る

・一話にて黄金の少女、マルグリット・ブルーユと邂逅

第一話（前書き）

主人公はハイスクール」D×Dを知りません
この小説に水銀さんは出てきません、水銀ファンの人はごめんなさい

第一話

さて、いきなりだが俺、兵藤 一誠は転生者だ。

あの神は俺にピッタリな力を渡すって言っていたがこれまで生きてきてさっぱり分からない。

命の危険も無いしね。

たった一つ能力の手がかりになるのは転生してから毎日見る夢だけ。

黄金の黄昏の浜辺、少女の歌そして――

――ギロチンに首を跳ね飛ばされる――

ただそれだけの夢。

さて、なんで俺がこんな話をしているかと言うと……

「イッセー！ 見ろよこれ！！ もう市場には出回ってない絶版物だぜ！」

「スゲー！！ どうやって手に入れたんだ！？」

俺が絶賛現実逃避中だからだ。

「この馬鹿どもが！ 周りの女子の反応を見ろよ！ ドンだけ引かれているかわかんねーのかよ！！！」

「「イッセー！ このお宝の価値が分からないのか！」」

「それがどんなお宝だろうが今！ 此処で！ 朝っぱらから！ する話じゃないよね！？」

この馬鹿どもの名前はメガネが元浜、坊主が松田…馬鹿だ。

ちなみにどうでも良い話だが元浜はメガネをつけると女子のスリーサイズが分かるらしい……

どこのスカウターだよ！

「「イッセー！！」」

「ああ、もう、うるさーい！！」

こういう所がなきゃ良い奴らなんだがなあ。

夕焼け。

夕焼けを見ると夢に出てくる黄金の黄昏の浜辺を、そして少女の歌を思い出す。

「血、血、血、血が欲しい」

現在下校中、元浜たちにエロビデ鑑賞に誘われたが断った。

「ギロチンに注ごう、飲み物を
ギロチンが欲しいのは――」

正直そんな気分じゃない、多分そんな気分になることはないと思う
けどね。

「血、血、血ってこんなところで歌う歌じゃねえなこゝ」あ、あの
！ 兵藤 一誠君ですよね！」え？ えっと…そうだけど？ 君は
？」

違う学校の子だと思う。

「わた、私は夕麻って言います！ そ、その…私と付き合ってく
ださい！！」

なんかいきなり告白された。

いや、自分で言うのもなんだけど俺、容姿は良いから結構告白され
る。

いつもは断っているんだけど…今日は違った。

腐った果実のような 甘い、甘い匂い。

嗅覚で感じない。

第六感的な直感。

俺は彼女に興味を持った…それで。

「いいよ、付き合おう」

告白を受け入れた。

夢

夢

夢

黄金

黄昏

黄金の黄昏

浜辺に居る少女

ウタ

——血、血、血、血が欲しい

今日の夢は違った。

——ギロチンに注ごう、飲み物を

歌を歌ってる少女が見える。

——ギロチンが欲しいのは

少女はとても美しかった。

今まで見た何よりも。

——血、血、血

俺は思わず彼女に話しかけていた。

「あ、あの！」

「——？」

彼女が振り向いた。

彼女の姿は美しく、女神という存在が言うのならば彼女のような容姿をしているのだろう、と思う。

「俺は兵藤 一誠君は？」

「わたし？ わたしは——」「ガァ!？」 ふえ？」

痛み、そう、痛み。

脳を、ぐじゅぐじゅにかきまわされたみたいなの。

痛み。

それとともに思い出されていく。

おそらく神様が彼女とあったときに知識を手に入れるように、力を手に入れるようにしたのだろう。

永劫破壊。

それが神が渡した俺の力。

だがまだそれは使えない。

ただそれだけが解る。

「だいじょうぶ？」

「ああ、大丈夫だよ。マルグリットさん」

「マリイで良いよ」

「マリイ」

ああ、そろそろ夢が終わる。

「そろそろ夢が終わる、また会おう？ マリイ」

「うん！」

そこで俺の視界は黒く染まった。

第一話（後書き）

マリイってこんな感じでしたっけ？

ここまで読んでもらってありがとうございます。

第二話

「あゝ昨日から付き合うことになった……」

「夕麻です、よろしくね！」

「「な、ななななななにあにいいいい！！？」」

今の状況を説明しよう。

朝、起床し、朝食を食べ、登校

←

登校中、夕麻ちゃんと会い一緒に登校

←

二人での登校中元浜、松田（以降メガネと坊主）と出会う

←

現在

「坊主のが松田でメガネが元浜だ」

「「よろしく願います！」」

何だったかな：何かの番組の集団で告白して手をとった人と付き合
う——みたいな番組があった。

そんな感じで手を出してきた。

滑稽だ。

「あ、あはははは」

夕麻ちゃんの顔が引きつっている…同情するよ。

あれから大変だった。

夕麻ちゃんと分かれてからメガネと坊主の馬鹿が詰め寄ってきたので、ゲンコでだまらせたと思ったら二人が気絶してしまった、それで二人を背負って登校。

登校してきてすぐに保健室に直行。

そして教室にて机の上でグロッキーだ。

「兵藤、授業中の寝るとは…いい度胸だなあ？」

不幸だ。

放課後、夕麻ちゃんが校門前にて待っていたので一緒に下校中だ。

「そ、そのう」

「なに？」

「日曜日、暇ですか？」

「うん？ ああ、デートかな？ うん、暇だよ」

「そうですか！ じゃあ駅前で……」

夕麻ちゃんは見ほれるような笑顔をした。

俺はその笑顔に……やはり甘いにおいがした。

「ねえイツセーはたのしい？」

マリイははにかみながら俺に聞いてくる。

「ああ、楽しいよ」

変わらぬ日常と変っていく日常。

おそらく夕麻ちゃんは何かの鍵だ、神が言う命の危険への。

日曜日のデートに……何かありそうだ。

日曜日6；26分、駅前、夕麻ちゃんとの待ち合わせまであと4分。

「よろしく願いしまーす」

「ん？」

ビラだ…『あなたの願いかなえます』？ なんのこっちゃ。

そんな感じで俺は十分ほど前に来てこうして待っている。

「あ！ イッセーくーん」

俺を呼んだ声のほうを向くと、俺のほうに向かって走りながら夕麻ちゃんが手を振っていた。

「やあ、おはよう」

「おはよう！ もしかして…まった？」

「いや、5分くらい前に来たところだよ」

「そこは『俺もちょっと前に来たところだよ』とか言うところでしょ！」

「はは、ごめんごめん」

そうしてデートが始まった……。

ウィンドウショッピング、店をみて回りながら彼女は笑って俺にこ

れはどうかな？　とかこれイツセー君に似合いそうだねっ！　とか言ってくる。

昼食はファミリーストランで食べながら笑いあう。

俺はその会話に楽しみを覚えながらも：やはり匂ってくる匂いを気にしていた。

夕焼けの公園、夕麻ちゃんが公園に行こう、といって来たので俺は従った。

——おかしい、変すぎる、なんで公園に誰もいないんだ？　さすがに夕方だといっても誰もいないのはおかしすぎる。

「今日は楽しかったなあ：イツセー君はどうだった？」

「俺も楽しかったよ？」

そう言い彼女は笑う。

「じゃあわたしのお願いを聞いてくれないかな？」

「叶えられない事は無理だよ？」

「大丈夫、そんなお願い事はしないよ」

そう言い、俺に体を預け耳元でささやいた。

「死：：：んで？」

「——ッ？！」

匂いが強烈になったと思ったら俺の腹に激痛が走った。

俺の腹を…光の槍が突き立っていた。

神の言っていた危：：険な日常が始まったのだ。

「怨むならばその身に神器宿セイクリット・ギアした神を怨みなさい？」

そういった彼女の背には黒い黒い翼があった。

「ガハア！」

血を吐いた。

ああ、血が流れていく。

赤い赤い血。

俺は彼女——マリィを思い出しながら赤を見て一つ上の先輩を幻視した。

そう、なんて言っただけ？

ああ、そうだ彼女は…リアス・グレモ…リー……。

「あら、誰かが私を呼び出したと思ったら死んで…いや、死に死にかけいるとはね…あら？　そう、面白いわね。　ねえその命、私のために使いなさい」

擦れゆく視界の中でそんな声が聞こえた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5420ba/>

ハイスクールD×D～黄昏の転生者～

2012年1月15日04時48分発行